

# 日本とドイツの宗教と教育

～フレーベルの「普遍」をてがかりに～

甲斐規雄

## 目次

はじめに

1. 第二次世界大戦後の日本の宗教と教育
2. 大正デモクラシー期の教育改革
  - (1) 河野清丸（日本女子大学小学部）の宗教的教育
  - (2) 青柳榮司（京都帝国大学）の宗教的教育
3. 日本における普遍の宗教と教育思想
4. ドイツにおける普遍の宗教と教育思想

おわりに

注

参考文献

## はじめに

宗教と教育との関係は、本来切り離すことのできない関係にある<sup>(1)</sup>。何故なら、双方共に人格を完成することが最終の目的でなければならないからである。そのため少なくとも古代、中世においては、いかなる民族であってもその地理的条件と歴史の中で独自の信仰の対象を維持し、形創ってきた。ドイツでも日本でも決して例外ではない。

フレーベル、F. の父親はプロテスタントの牧師であり、彼の生地オーバーバイスバハの教会、その住民の教父として教区住民の心の救いの担い手であった。そして牧師住居の窓から見えるその教会が、彼にとって大きく偉大な教会として生涯彼にとって「普遍」の思想の根底に、まるで子ども達や母親達のための思想を生み出す泉のように存在していた。

幼いフレーベルは、父が教区住民にキリストの教え、キリストの母聖母マリアについて語る時常に定められた二列目の一番前の席に座り、父の教えに聞き入っていた。フレーベルの母は生後5ヶ月でこの世を去り、そして住民の心、生活、教育、治安等こもごもの役割を担っていた父もフレーベルの父ではなかった。その意味で両親のない幼児期であったと言っても過言ではない。また、父のフレーベルに対する対応も住民の一人としての扱いに過ぎなかった。従ってフレーベルにとって、キリストや聖母マリアは宗教的存在というより普遍的な父であり、母であったといって過言ではない。

フレーベル研究に手を染めた大学院でのテーマは、「神」と「人間」の概念を「衝動」 Der

Trieb をキー・ワードにして説明しようと試みたものであった。ある時には、宗教という我が国における第二次世界大戦のトラウマから、あえて目をそらすためにプロティノスの神秘主義の思想を手がかりにフレーベルの宗教の側面を見ようとした<sup>(2)</sup>。

その後政治、経済、思想、宗教等、人間の生活全てに及ぶ分野、例えば時代精神、共有文化・文明等人間の因って立つ時代精神、基層文化の解明に焦点を絞ってきた。

しかし、一方でElmer L. Towns “History of Religious Educators” Baker Book House Company 1976. の中にフレーベルと同時代のペスタロッツ、ヘルバルトが取り上げられているにも関わらず、近代ドイツ教育思想に誕生と共に全身に浸透したキリスト、聖母マリアの愛を教育思想の核にして、教育実践に生涯をかけたフレーベルの項目がないことにやりきれない屈辱を味わっていた。

2002年旧東ドイツにフレーベルの教育実践の環境に2週間身を委ねた。中世そのままの森、教会と鐘の音、城郭、澄んだ川、草原、フレーベル創設の幼稚園等々、歴史と自然が常に住民の身近の散歩の範囲内に普遍の対象として存在した。

しかし日本は、春夏秋冬、海、川、山、森林等、普遍を表現する人間が因って立つ環境にこれほど恵まれている国はないように思うのに、身近にあるその春夏秋冬、海、川、山、森林等々自然をコンクリートで塗り固め、道路を造り、春夏秋冬、海、川、山、森林等々の日常的な自然を遙か彼方に限定してしまった。一人一人が因って立ち、成長し続ける環境を非日常的な自然環境に作り替えてしまったと言って過言ではない。

今日の我が国の教育の現状に目を向けるとき、戦後最悪の状況を呈していると言って過言ではない。制度疲労した教育制度の論争には、教育制度の因って立つ歴史と普遍の思想が欠落し、その時代の為政者達の駆け引きの中で妥協的教育行政が行われてきた。一体その根本の何が問題なのであろうか。もしかすると第二次世界大戦の敗戦で、GHQによって日本の歴史と文化、自然宗教としての神道を放棄させられたことと深い関わりがあるのではないか<sup>(3)</sup>。という仮説である。

## 1. 日本の宗教教育

1945年12月15日GHQは、「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」を指令、引き続き12月31には「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」を指令した。そして1947年3月31日日本国憲法の「人間普遍の原理」に基づき、教育基本法が制定され、そこには、「個人の尊厳を重んじ」、「普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造」を目指す教育を決意した。そしてその第9条に「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上」尊重され、そしてその第二項に「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動」を禁止した。戦前、戦中の相次ぐ戦争の中で、絶対的な国家神道の状況下、多くの不幸を味わった。そのことを考慮すればもったもなことである。

GHQは、「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」の指令も当然である。日清日露戦争後の日本の軍事国家は、日本国民を路頭に迷わせる結果に終わり、多くの子どもたちが、祖父母、父母や兄弟姉妹を失ったことも事

実であるから。

しかし、ここに記された「普遍的にして」という言葉に焦点をあてて見るとき、この日本の古来の歴史、民族、風土、地理的環境等により成立した信仰、その国の因って立つ思想を何故放棄しなければならないのか。仏教は84,000巻という膨大な経巻があるのに対して、神道は神殿の「鏡」と「祝詞」が存在するに過ぎない、脅迫性のない普遍の教えである。そのため、新年には日本国中の国民が家族揃って、宗派を問わず神社に参拝する。

それは、「日本は、春夏秋冬、海、川、山、森林等々、人間が因って立つ環境にこれほど恵まれている国」には、その国ならではの独自の信仰、習わしそしてそれに基づく独自の思想があってしかるべきであると思うし、当然のことであると思う。

戦後の米国を中心とする経済、科学中心の政策は、「全地球的資源枯渇と海、山、空、陸、水、空気といった、人間だけでなく、あらゆる生物の生存に欠くことできない、大切な要素を汚染し、生存の環境破壊をきたした。〈略〉人間自身の首をくくる崩壊作用を進行させるにいたった。〈略〉文明とは何かが、改めて問い直され〈略〉東洋の精神文明こそ、人間を救い得る、古くて新しい“道”ではないか〈略〉神や仏につらなて生きていこうとする人間たちの純粋な心<sup>(4)</sup>」と柞木田龍善は述べている。洪自誠の『菜根譚<sup>(5)</sup>』、陽明学派佐藤一斉の『言志四録』に述べられる思想の原点であると確信できる。「天地の道理を説きながら、しかも人間の真理をよく心得、道義を尊びながら風流を排斥していない。一言でいえば人を正しい中道に向かわせるのが彼の教えである<sup>(6)</sup>。」つまり「人の道」とも言える。

宗教と神道との違いは何処にあるのであろうか。「宗教とは、人間本来元は何かを考える学問～人間の祖先はどういうものを教える形而上の学問だから、それを教える釈迦、キリストというふうに、宗祖が存在し」と柞木田は述べ、その「宗祖は人間の踏み行すべき《道》を教える〈略〉日本は宇宙の大親神様の血脈を承けている宗家だから、日本の神道には、分家のように宗祖も経典も必要はなく、その尊い血脈である『神ながらの道』という人間精神の骨格、鏡によって魂の在り方を示しているように、「日の本<sup>ひのもと</sup>つ国」、日は霊であり、火である。というのは太陽を表している。〈略〉日本の国の地形もまた、南北に細長く〈略〉龍体、即ち“神の形”<sup>(7)</sup>」をなしている。日本舞踊、能など古典芸能、日本家屋の畳、障子、襖の開閉の身のこなし等、日本人の情緒が連綿として漂っていると柞木田龍善は述べ、「田植えすると同時に、田の神様に豊作を願う春祭を行い、秋には、おかげさまで実り多く収穫を得ましたと、又田の神様に感謝する秋祭りを行ってきた<sup>(8)</sup>。」それは、日本の一人の人間誕生とその一生にも、帯祝い、お七夜、命名、内祝い、お宮参、お食初、初節句、七五三、入園・入学、卒園・卒業、十三参り、成人式と常に神社と深く関わっている。そこには常に家庭では一人一人の掛け替えのない人の幸せを普遍の対象としての神棚、そして神社で神に祈り、願う。そして初観音、初大師、初地蔵、初天神、初不動から納めの水天宮、納めの観音、納め的大師、納め地蔵、終い天神、納めの不動まで常に神や、先祖に願い、感謝する。神との交渉により神意を理解し、加護を願う。それぞれの宗派とは無関係に行われるこの行為は、恐らく無意識に先祖の願いと共振、神を具体的な形として見るのではなく、常に変わらない普遍、真実を求めている行為なのかもしれない。

「戦時下、神道が国家神道として政治的道具にされた<sup>(9)</sup>」ことが、その国ならではの独自の信仰、習わしそしてそれに基づく独自の普遍の思想があつてしかるべきであるのに、この「廃止」の指令により、日本人のアイデンティティを根こそぎにし、今日の日本の教育の現況をもたらしたと結論しても過言ではない。

## 2. 大正デモクラシー期の教育改革

我が国は大正デモクラシー期の教育改革期、多くの独自の教育思想が教育内容、教育方法そしてその思想、方法の実践の場所として私立学校を創設している。八代教育思潮である①樋口長市「自学教育論」、②河野清丸「児童教育論」、③手塚岸衛「自由教育論」、④千葉命吉「一切衝動皆教育論」、⑤稲毛金七「創造教育論」、⑥及川平治「動的教育論」、⑦小原国芳「全人教育論」；玉川学園、⑧片上伸「文芸教育論」に加えて、独自の思想に基づき⑨中村春二・児玉九十；成蹊小学校、⑩沢柳政太郎・小原国芳；成城小学校、⑪羽仁もと子；自由学園、⑫児玉九十＜体験教育論＞；明星実務学校・明星学苑、⑬赤井米吉；明星学園、⑭野口援太郎；児童の村小学校等私立学校を創設している。

ここに、大正デモクラシー期の代表人物である河野清丸の『宗教的教育論』と京都帝国大学の青柳榮司『宗教的信仰と教育』を検証しておく。

### (1) 河野清丸（日本女子大学小学部）の宗教的教育

大正デモクラシー期の教育改革の代表人物である河野清丸は、先人の『宗教学』の「無限を理會する能力或は性向」、「価値の保存における信仰」を引用し、双方とも宗教の究極的意義を哲学的に表現しただけで実践的活動の領域での解釈ではないと述べている。従って「教育」との関わりについて論述するとき、どうしても内面的、外面的の二方面から考察する必要があると述べ、内面的には「信仰及び感情即ち内的・精神的性向」、外面的にはこの「主観的性向を適當なる動作、例えば拝礼奉仕のごとき活動」と表現している<sup>(10)</sup>。従って「信仰とは宗教の認識的方面であつて、感情に刺激せられて、内部生命の要求を満足せしむる所の対象を提供する<sup>(11)</sup>」とし、その実践は礼拝と奉仕と説明している。別言すれば超越した普遍的な対象と自分自身とを一致させ、現世的経験を超越しようとする意識である。つまり、表面に現れている以上の普遍のものへの信仰である。「現象の背後に潜む奇しき力を自身の身邊に招致せんことを求める<略>此の超越者との一致に含まれた所のものを漸次明瞭ならしめる過程<略>其の発達三段階に分かつなら、第一が蛮族的宗教、第二が国民的、第三が宇宙的宗教であるが<略>第一段階に於ては事物の「精」を以て感覺的事物の背後に潜む<略>第三段階に達すると、神は超越的、心靈の實在となる<略>人は完全に善なるものを其の直接觀察から発見することが出来るならば、彼は最早宗教を有しないであろう<略>宗教の最低級なる形式は信賴といふ作用によりて開始される。信賴とは、一定の条件の下に於て、目に見えない心靈が其の礼拝者を救済することを期待する<sup>(12)</sup>」と述べ、神の原理論を展開し、その上で宗教的教育方法論を展開している。

その具体的方法は、生物の順応作用と神との関係、更に宗教心養成法として家庭の浄化

が先決であり、当時の生活即教育、体験教育等盛んに提唱されている状況に鑑み、家庭において宗教の真理を授けることが目的ではなく、「アダムに取りては天堂は家庭である。善良なるアダムの後裔（人間）に取りては、家庭は即ち天堂である<sup>(13)</sup>」を引用し、宗教的生活、宗教的行為を実行させることを主張している。

学校教育の方法は、宗教教育ではなく「宗教的教育」であるべきであると述べている。それは、宗教教育は形式的で知識の伝達あるが、宗教的教育は実行的、活動的である<sup>(14)</sup>」が、公立学校で宗教教育を排斥する教師に対しては、決して一宗一派の教義を注入することではないと述べる。

学校教育では特に美の享受、批判的鑑賞、作製、芸術の象徴性を強調し、その役割を論述している。当時教育方法にもてはやされていたヘルバルトの五段教授法に偏している状況を憂いて、統一した精神教育の確立を訴えている。教師の子どもの精神にどの程度配慮して教育しているか、この論理はプロティノスの神秘主義を彷彿とさせる<sup>(15)</sup>。しかし当時の日本の世界大戦の状況下、歴史教材に戦争を抜きにして文化財を高調させる方針に「歴史教授の際、事宗教に関する場合には、之と芸術との関連にも関連して、教授に生氣あらしめると同時に、宗教的陶冶・修養に資すべきである<sup>(16)</sup>。」と主張し、知育・徳育・体育に美育を加えることを提言している。この考え方の中にはプラトン『国家』とルソー『エミール』の芸術教育論が下敷きになっていることは言うまでもない。

## （２）青柳榮司（京都帝国大学）の宗教的教育

「人間として最も大切なものは云ふまでもなく人格である。即ち人格を完成することが人間最後の目的でなければならぬ<sup>(17)</sup>。」と「学制頒布五十年」に際し『宗教的信仰と教育』を上梓した「眞正的教育」を書き出している。そしてその人格の完成は智情意三要素の圓滿に調和せる発達に在るとして、生理学的に「智育は知育：大脳皮質の発達」、「情育は信仰教育及体育：脳、脊髓、神経、血管、内臓、大小筋肉の鍛錬」そして「意育は脳、脊髓、神経、大小筋肉の鍛錬」と説明している<sup>(18)</sup>。

「全体的に圓滿に調和発達せしむることを主旨とせねばならない。是れ学校教育と共に信仰教育及び体育の常に閑却すべからざる所以である<sup>(19)</sup>。」と述べ、「現在我が国の学校教育はく中略>生徒等が、教師の講義中不真面目な気持ちに逮はれ、或いは体操や実験等に嫌々ながら参加し、<略>厳粛な儀式にも出席を厭ひ、運動競技や室内遊戯等の際にも互いに清からざる心を以て相争ふやうな事が度重なり<略>放置せらるるとしたならば、彼らの情操は次第に劣化する<sup>(20)</sup>。」とし、「信仰教育は主に情操の陶冶を旨とし体育は特に意志の鍛錬を主とする<sup>(21)</sup>。」この前提には時代的な要素が含まれているが、今日の状況と重なる。大学令改正「品性の陶冶、国家思想の涵養を兼ね」と付け加えざるを得なかった状況が、都市部だけでなく地方でも教育内容は不備貧弱であり、「教育勅語をすら殆ど生徒の前に奉読機会のない学校さへも無いやうな学校さへもあり、<略>近時我国の上下を通じて、情操の不純なる薄志弱行の人物が充満して居ることは敢て怪しむに足らないのであって、邦家の前途、全く寒心に堪へないものがある。今や正に我が国の教育界は一大覚醒を以て根本的改革をの必要<sup>(22)</sup>」があるとしている。

人間の力には、全能ではないから限りがある。かといって学力、手腕、力量にも限度が

ある。青柳は、「眞剣味」という人間の不思議な底力に焦点を当て、「情意の働き」と「宗教的信念」に触れている。前者は人間の不思議な底力であるとしている。

「宗教的信念」は、「情操を醇化し意志を強固にして確乎不拔の宗教的信念を養ふにあるといふことである。＜略＞神、仏、天、或は絶対者等いずれの観念でもよいが、とにかく、超自然的超人間的のある偉大な絶対の力の存在を信じ、此の力の啓示する方向、即ち人類としては文化文明の無限の発展に向かつて、出来るだけ大なる歩みを進めること、言い換えれば、真理を辿り理想を追ふことに無上の満足と歓喜と憧憬と感謝とを感じ、此の目的の爲めには、どんな難儀も厭はず、それに打ち勝つて＜略＞世界の文化、人類の幸福の爲に力を尽くすことは取りも直さず神の意図に奉仕する<sup>(23)</sup>」ことにより、「此の上の満足はない、実に嬉しい、有難い、勤め励まずには居られない、という純一真摯な心持を以て愛の力、慈悲の光—尊い情操—を益々發揮することである。此の信念が根を張り枝を広げて、そこに、人間相愛の美しい花も開き共存共栄の大きな果も結ぶのである<sup>(24)</sup>。」

この信念は体験により信仰心へと浄化することの努力を「知識階級の人々にどれだけ根深い信仰心があるか、其の日常生活に於て、宗教的錬磨が如何様に行はれ、依って信仰心が何ほど強く養はれつつあるか、又家庭、学校、社会一般等に於ける子女の教育は宗教的信仰の養成に向かつて如何なる適當の手段を講じているか、といふ問題なのである。而も此等の点から見た我國民教育—外国とは自ら其の性質を異にする事にすべき—の成績は甚だ失敗であつたことを残念至極とするのである<sup>(25)</sup>」と喝破し、「宗教無くして人を教育するのは利口な悪魔を作るに過ぎぬ」を引用し、更にフィヒテの『独逸國民に告ぐ』を引用しながら民族の情意（心、性情、気性、気質）Gemütの力を力説し、「眞剣味」は最後の勝利と結んでいる。

青柳榮司は、教育と信仰について「我教育界の大勢は＜略＞最大根本の要素たる信仰教育を等閑に附して、一途に知識の注入を維れ努めて来たことは由々しき失策である。往昔より明治維新前後まで、我國民は一般に極めて敬神崇祖の念に厚く、先輩識者が後進子弟を教へ導くにも、第一にこの精神を鼓吹したものである。然るに、維新以後欧米文物の輸入と共に何時しか物質主義に泥み、知識の吸収のみに耽り、果ては、この尊い傳統的精神文化の基調たる信仰教育と武士道とを忘れんとする者が多く、遂には知識階級無用論を唱えたり、＜略＞近似の社会不安と云ひ思想悪化と称し、何れもその端をここに発しているもので、全く各人が信仰を失ひ修養の根本を誤れる当然の帰結であらねばならぬ<sup>(26)</sup>。」と結んでいる。

### 3. 日本における普遍の宗教と教育思想

日本は、春夏秋冬、海、川、山、森林等々、人間が因って立つ環境にこれほど恵まれている国はないように思う。そして大地には大地の産土神があり、山には山の神があり、海には海の神がある。この天然自然の中で人間以外の生物と同じ存在として生かされて生きてきた。

我々は、その自然を「みる」とき無意識に「見る」（頭）、「視る」（止）、「観る」（圓）、「看る」（環）、「診る」（視）を使い分けている。あるがままのものを「見る」ことは、そ

こに対象物の私との関係であり、少し凝視する「視る」は注意深さがある。「観る」は本来「こころ」で見ることを意味するが、ペスタロッチの直観*Anschaung*という対象に直接触れて、直観教授法という方法がこの思想に対応して今日に至っている。

この事実は、スイス、ドイツ、オーストリアを含めて、大自然の恩恵に感謝しながら生かされて生きてきた民族の特徴なのかもしれない。

しかし一方で、我が国の民俗学の停滞が、この大自然に抱かれた恩恵を学び、実感することなく青少年時代に物質を優先させて過ごす。

果たして日本が日本であることの歴史が、児童生徒だけでなく大学生や社会人達にどこまで伝えているのであろうか。一人一人が自立した地域のかげがえのない住民であるべき条件としての地域の地理、歴史、文化、文明をどこまで義務教育は配慮し、そこで生かされて生きていることを子供達は実感するのであろうか。民俗学の復活を願わずにおれない。

次に、今日本の学校で歌われなくなった曲の詩を転載しておく<sup>(27)</sup>。

犬童球溪作詞「故郷の廃家」は、故郷の美しい自然にとけ込んだ廃家に熱い思いを寄せ、母を偲び友を思い、自らの生かされ生きてきたことに感謝の気持ちが漂う。

幾とせ故郷 来てみれば 咲く花 鳴く鳥 そよぐ風 門辺の小川の ささやきも  
なれにし昔に 変わらねど 荒れたる 我が家に 住む人 絶えてなく  
昔を語るか そよぐ風 昔をうつすか 澄める水 朝夕かたみに 手をとりにて  
遊びし友人 いまいずこ さびしき 故郷や さびしき 我が家や

佐世保女学校の開校記念に武島羽衣作詞「美しき天然」はこの日本の四季折々の自然の美しさの中に無条件に身を委ね、天地の間に生かされて生きていることを感謝し、讃えている心を感じ取ることができる。

空にさえずる 鳥の声 峰より落つる 滝の音 大波小波濤濤と 響き絶えせぬ  
海の音 聞けや人々 面白き 此の天然の 音楽を 調べ自在に 弾き給う  
神の御手の 尊しや  
春は桜の あや衣 秋は紅葉の 唐錦 夏は涼しき 月の絹 冬は真白き 雪の布  
見よや人々 美しき この天然の織物を 手際見事に 織り給う 神のたくみの 尊しや

文部省唱歌「尋常小学校唱歌」に収められた堀沢周安作詞「いなかの四季」の中でも同様に感謝し、讃え、この誘いを讃え、感謝している。

道をはさんで畠一面に、麦は穂がでる菜は花盛り。眠る蝶々とび立つひばり、  
吹くや春風たもとも軽く、あちらこちらに桑つむ乙女、日まし日ましにはるごも太る。  
ならぶ菅笠涼しいこえて、歌いながらに植えいく早苗。ながい夏の日いつしか暮れて、  
植える手先に月かけ動く。かえる道々あと見かえれば、葉末葉末に夜露が光る。  
二百十日も事なくすんで、村の祭りの太鼓がひびく。稲は実がいる日和はつづく、

刈ってひろげて日に乾かして、米にこなして俵につめて、家内そろって笑顔に笑顔。  
 松を火にたくいりの側で、夜はよもやま話がはずむ。母がてぎわの大根なます、  
 これがいなかの年こしごかな。棚の餅ひく鼠の音も、更けて軒端に雪降り積もる。

#### 4. ドイツにおける普遍の宗教と教育思想

ドイツは、日本との戦前戦中の緊密な関係の中で、戦後41年間分割された旧東ドイツ、一方分割を免れた日本、今共産主義イデオロギーの主義、主張の夢から覚めやらぬ旧東ドイツは、マルクス＝レーニン主義の古典に立脚することを捨て去り、近代ドイツの教養、改革教育の遺産を継承し、「ドイツの緑の心臓」Grünes Herz Deutschlands 近代ドイツといわれるチュウーリングゲンの森、物語に出てくるような現代化されていない広い酪農地、放牧された牛の群れ、中世が残した広い領地と城郭、そこには現代建築の高層ビルはなく、小麦畑が収穫を待つばかりに黄色に色を染め、冬に備えて刈り取られた牧草が直径2メートルの輪にぐるぐる巻きにされ、点在し、中世、近世さながら乃遺産が、何もなかったかのように中世に残した広い領地と城郭、教会、ゆったり流れるシュヴァルツァー川、ウェーザー川、ザーレ川は中世・近代の原風景の中で、ゆったりと流れる悠久の時間に身を委ね、ルターの遺したキリスト教的ヒューマニズム、フィヒテのドイツを核にし、“根源的生命” Ursprung Leben 及びあらゆる精神的生命の源泉より、即ち神よりの生命の耐えざる流れ」に身を任せ、「人類の諸関係がその原像Urbildのままに絶えず発達せしめられること、それ故に従前決して存在しない新しい生命の創造<sup>(28)</sup>」をめざしている。

ここには、決してカトリック、プロテスタントの境界はなく、普遍の象徴である森、山、林、河川等々、人間が因って立つ普遍の環境と共存している状況を見ることができる。そこには、第二次世界大戦以前の天然自然の環境の中で、神に感謝し、フレーベルの「さあ、子どもたちに生きようではないか!」Kommt, last uns unsern Kindern leben! という天地の間に天然自然と同様、神によって生かされて生きている子ども、それは万有在神論、それは児童神性論に基づく児童中心主義の教育へと発展する。

「キリスト教のマリア崇拝が、無数の、見る者に印象的な通俗美術画のおかげで、母親像に輝きを与えたかに見えた<略>そこからすぐに一般庶民の女性たちが家庭の母として幸福な生活を送るようになったとはいえない<sup>(29)</sup>。」そこには、ドイツも日本もあらゆる宗教に拘ることなく、人間は天と地の間に神の表現として自然と共に生かされて生きている存在であり、そのことを無条件に感受しても尽きることのない「普遍」を読みとることができる。

#### おわりに

宗教の問題を取り扱うことは、それなりの根拠がなければ困難な作業である。かねてからドイツと日本の共通性を実感しながら、その核になるものが発見できず、今日に至った。

一昨年旧東ドイツにフレーベルの教育実践の環境に2週間身を委ねる機会を得たが、そこに居て異国を感じることはなかった。そこには極めて日本に類似した、中世そのままの森、教会（神社、仏閣）の鐘の音、城郭、澄んだ川、草原があり、天と地の間で大自然に



しっかり抱かれていることに逢着したからかもしれない。

その意味でドイツのカトリックとプロテスタントとの関係は、日本の神道と仏教との関係と類似しており、その周縁に天然の自然に恵まれた環境の中で、ゲルマン民族と大和民族が天然の自然という「普遍」を共通概念として等号で結ばれているように思えてならない。

## 注

- (1) 拙著「ドイツ啓蒙思想の宗教性とF. フレーベル」明星大学教育学研究紀要創刊号 49～58頁 1986
- (2) 拙著『東ドイツの悲劇から安心の故郷へ』（教育学研究紀要 第18号） 明星大学 教育学研究室 2003
- (3) 拙著「新人文主義のギリシャへの回帰—F. フレーベルのゲッティンゲン大学時代を中心に—」明星大学教育学研究紀要第2号 54～65頁 1987, 「F. フレーベルの教育史的位置づけの再考」明星大学教育学研究紀要第7号 51～64頁2002, 「F. フレーベルと神秘主義」『教育の真理と探究』明星大学出版部 97～118頁1993, 「プロティノスの二つの世界—F. フレーベルの世界観研究の手懸かりとして」明星大学教育学研究紀要第8号 1～13頁 1993, 『フレーベルの神秘主義の問題』日本ペスタロッツ・フレーベル学会「ペスタロッツ・フレーベルにおける合理主義と非合理主義」シンポジスト 1994, 「フレーベルの神秘主義—プロティノスの発出と還帰を手懸かりに—」日本ペスタロッツ・フレーベル学会『人間教育の探究』第7号 19～35頁 1995, 「フレーベルの形而上学的発達観—プロティノスの発出と還帰を基調にして—」1996
- (4) 柞木田龍善『日本神道～日本人のトランスパーソナル～』風濤社 1986 12～13頁
- (5) 拙著『人間を磨く～洪自誠「菜根譚」とともに』明星大学父兄会会報第72号12～20頁
- (6) 同前14頁
- (7) 前掲書『日本神道～日本人のトランスパーソナル～』101～102頁
- (8) 同前書 103頁
- (9) 同前書 113頁
- (10) 河野清丸『宗教的教育論』南光社 1928 2頁
- (11) 同前書3頁
- (12) 同前書4頁
- (13) 同前書446頁
- (14) 同前書451頁
- (15) 拙著「F. フレーベルの教育史的位置の再考」教育学研究紀要 第7号51～64頁
- (16) 同前書456～457頁
- (17) 青柳榮司『宗教的信仰と教育』人文書院 1934年 1頁
- (18) 同前書4頁
- (19) 同前書6頁
- (20) 同前書7頁
- (21) 同前
- (22) 同前書8頁
- (23) 同前書61頁
- (24) 同前書61頁
- (25) 同前書74～75頁
- (26) 同前書194～195頁
- (27) 『美しき日本の歌—歌詞集』日本音楽教育センター

- (28) 日本ペスタロッチャー・フレーベル学会編『ペスタロッチャー・フレーベル事典』1996
- (29) Ingeborg Weber-Kellermann, Die Deutsche Familie, Suhrkamp Verlag, 1974(鳥光美緒子  
訳 『ドイツの家族』 勁草書房1991 41頁 )

#### 参考文献

- (1) 河野清丸『宗教的教育論』南光社 1928
- (2) Elmer L. Towns "History of Religious Educators" Baker Book House Company 1976.  
(三浦正訳『宗教教育の歴史 人とその教育論』慶応通信 1985)
- (3) Valentin Weigel "Dialogus de Christianismo "herausgegeben von Alfred Ehrentreich  
1584 ,  
(山内貞男訳『キリスト教についての対話』(ドイツ神秘主義叢書12)創文社 1997
- (4) 久木幸男『日本の宗教』サイマル出版会 1973
- (5) 福島政雄『宗教的自覚と教育』同文館 1937
- (6) 青柳榮司『宗教的信仰と教育』人文書院 1934
- (7) 多田道太郎・上田篤・中岡義介編『空間の原型 すまいにおける聖の比較文化』  
筑摩書房 1983
- (8) 武藤一雄・平石善司『キリスト教を学ぶ人のために』世界思想社 1993
- (9) 石田一良『カミと日本文化』ペリかん社 1984
- (10) Valentin Weigel, Dialogus de Christentianismo, Alfred Ehrentreich, Stuttgart=Bad  
Cannstatt, 1967 Werke Deutschermystek in Auswahl Band 12(山内貞男訳『キリスト教  
についての対話』創文社 1997)
- (11) 宮田登『神と仏ー民俗宗教の諸相ー』日本民族文化大系 第4巻 小学館 1983
- (12) 柞木田龍善『日本神道ー日本人のトランスパーソナルー』風濤社 1986